

CSR デザイン&ランドスケープ設計事務所 有限会社
代表取締役

平松 宏城 氏

金融の世界から
ランドスケープの世界への転身

7年前の時点で、お金がお金を生むようなビジネスモデルに限界を感じていました。丹精込めて何かをつくるとか、時間をかけて育て上げていくという、ランドスケープとか造園とは、正反対の価値観。レバレッジをかけて、小さなリターンを何倍にもしていくような手法が効率的であると言われる世界に違和感を覚えるようになってきたことが、転身を考えるきっかけとなりました。

そうしたときに、あらためて日本の街並みや景観を見て、「これが世界第2位のGDPを誇る国なのか」と愕然とする思いをしました。経済活動の豊かさが、国土に蓄積されていない現象。新しいものを建てるときはGDPにプラスとしてカウントするけれど、美しい景観や環境を壊した方はマイナスのカウントをしない。GDPとして数字を稼いでも、それは国の

豊かさを示しているものではないと思うのです。真に豊かな国づくりに目指すのであれば、環境の視点で国土やインフラの整備に投資していくことが必要です。そこ

では緑が果たす役割が大きくなるはずですが、そのような諸々の想いが、金融システムとの連携を図りながら、持続可能なランドスケープの推進を試みる動機となりました。

日本における
投資対象としての緑の可能性

アメリカでは、緑を含めた不動産の環境性能の経済合理性がある程度確かからしさをもって示されており、リターンを期待できる投資先として位置づけられつつあります。日本でも、ランドスケープデザインが重要度を増し、投資対象としても魅力的になるはずですが、間接金融中心の日本では、投資家の思想や意識が投資行動に反映されにくいという難しさはあり

緑の本質的な可能性の
拡大を目指して

私が目指しているところは、ランドスケープの本質的な可能性をどこまで広げられるかです。評価はあくまでそのツールです。都市生活というものは、本来豊かであったはずの自然の恵みを受け、負荷を与えながら建物など都市構造物を作り成り立っています。外部環境や地域環境への配慮

平松 宏城(ひらまつ ひろき)氏

CSR デザイン&ランドスケープ設計事務所
有限会社 代表取締役。
LEED-AP(US Green Building
Council) 一級造園施工管理技士。
日米の証券会社に19年間勤務の後、
ランドスケープデザインの世界に転身。
金融システムとの連携を図りながら、一
貫して持続可能なランドスケープの推進
に努める。



緑を選択する価値

COPIRO(生物多様性条約締結国会議)の名古屋での開催を来年にひかえ、企業もそれぞれ生物多様性保全に向けて取り組むという機運にあります。緑の価

のない建設が進むことにより、風通りを妨げる、熱を排出する、涵養性が低下するなど、環境にマイナスをもたらすのです。外部環境や地域環境を考慮した、ランドスケープを施すことにより、開発によりもたらされたマイナスをゼロに近づけていくことができます。むしろ、それまで環境圧の高い都市構造物があった場所を、グリーンビルディングの発想で再開発すれば、プラスにしていくこともできるのです。私たちの都市のありかた、生活のあり方を考えたとき、こつとした考えを企業並びに、市民一人ひとりに根付かせていくことが大切だと思います。

値は、生物多様性保全に限られたものではありませんが、良好な緑地の保全創出を、生物多様性保全という明確な意思と意図をもって取り組むことは、CSRにおいて価値のある行動であると言えるでしょう。

クーラーなどを使って室内を冷やし、外側に熱を排熱することは、外部環境を悪化させているということ。建築や設備の新しい技術で、環境負荷をこれまでよりも軽減できるようになってきているとはいえず、それだけでは環境問題や地域コミュニティの問題は解決しないということ。緑に係わる人は、声を大きくして言っていないか、声を大きくして感じています。今こそ変わらなければ、日本の都市は良くなりません。今後の重要な時期に来ているのだと思います。